

## ご挨拶 ～今期の課題として～

山岡 裕一（日本菌学会会長）

2015年4月から、日本菌学会会長を務めさせていただくことになりました。伝統ある学会の会長として、これまでこの学会の発展に貢献されてきた先生方、会員の皆様に心から感謝するとともに、この学会がさらに発展するよう努めて参りたいと思います。ご挨拶として、今期に取り組みたい課題について述べさせていただきたいと思います。



### 1. 学会運営の安定化と継続性

#### (1) 学会の法人化

日本菌学会は、もうすぐ60周年を迎えようとしています。約60年の間、菌学会は、これまで任意団体として活動を行ってきました。任意団体は、法人格を持たないため、団体として法律行為を行うことができず、代表者が個人の資格として行ってきました。それでも学会としての活動は行っていたのですが、近年、任意団体としての活動に対しより厳密に規則が適用されるようになり、従来通りの活動を継続することが次第に難しくなってきました。実は、これまでも学会の法人化について検討しており、2010年の時点では、「法人化することにより社会的信頼性が得られるというメリットはあるが、今すぐに法人化に動き出すには現実的（特に、経済的）に無理がある」という判断をしました。しかし、この数年で、社会の情勢、法人化に向けての周辺環境はさらに変化しました。前期の理事の皆様が再度検討を重ねられた結果、運営にかかる費用の件も目途が立ち、法人化は可能で有り進めるべきとの引継ぎをいただきました。今期の理事会でもさらに検討を重ね、先日の総会で、法人化検討委員会を中心に法人化に向けて準備を進めていくことを、お認めいただきました。

法人化することにより、事業体としての順法性（コンプライアンス）が高まり、組織の基礎が安定化し、社会的信用性が向上します。また、学会名で法律行為（契約、雇用など）が実行可能になり、口座の開設やクレジットカード決済も、個人に頼らず学会としてできます。今後、皆様のご意見をいただきながら定款案を整えるなど、法人化に向けた準備を進めて参ります。

#### (2) 会報編集作業の安定化と会報のさらなる充実

日本菌学会が実施している重要な事業の一つが、会報の発行です。英文誌の *Mycoscience*、和文誌の日本菌学会会報ともに重要ですが、特に *Mycoscience* は歴代の編集委員長を中心とした皆様のご努力で、インパクトファクターがとれるまでの国際的にも評価の高い国際誌になりました。このことは、学会にとっても、菌学の発展にとっても大変有り難いことであると同時に、菌学会に課せられた責任も大きいです。国際誌としての高い水準を保ちながら、今後の発行を継続してい

くためには、*Mycoscience* の編集体制を強化するとともに、編集作業の効率化をはかり、編集に携わる方々の過度な負担にならないようなシステムに移行し、より安定した編集体制を構築したいと思います。*Mycoscience* の充実、次に示します国際化への対応にも大きく貢献します。

また、和文誌も国内の会員や社会に対する情報発信のために重要な役割が有ります。国際化、国際化と言われる余り、和文の論文が軽視される傾向がありますが、和文の論文も内容によってきちんと評価されるべきであり、貴重な学術資料であることには変わりありません。皆様からのご投稿を促進し、充実した雑誌にしていきたいと思ひます。

### 2. 国際化への対応

近年、我々を取り巻く環境のグローバル化が進み、その対応が求められています。菌学会では、上記のように英文誌の会報、*Mycoscience* を発行し、菌学に関する様々な情報を海外に発信し、国際的な貢献をしています。また、これまでに、諸先生方のご尽力により、アメリカ、イギリス、韓国、中国の菌学会と合同のシンポジウムや大会を実施し、海外の研究者との交流を深める機会を提供してきました。また、1983年には東京で第3回国際菌学会を開催、1996年には千葉でアジア国際菌学会議を開催するなど、菌学の発展に大きく貢献してきたと言えます。以前に比べ、国際シンポジウムの開催、あるいは参加の機会はずいぶん増えました。菌学会としても、これまでおつきあいのある国々の菌学関係者との交流を促進するためにも、今後も国際シンポジウム開催の機会を増やしていきたいと思ひます。

私は大変幸運なことに、学生になって初めて参加した国際学会が東京新宿で開催された第3回国際菌学会でした。世界各国からたくさんの著名な先生方が参加され、連日様々な専門分野に関するシンポジウムやポスター発表が行われ、ただただ感激するばかりでした。当時の私には、比較できる経験

が無かったため、この国際学会がどんなにすばらしい会であったのか、自分にとっても如何に貴重な経験であったのかを判断することができませんでした。また3回目の会議を日本で実施できるだけの実績と実力を当時の先生方がお持ちであったことを、後になって知ることになりました。私自身この学会でポスター発表させていただいたことも有り難かったのですが、それ以上に富士山でのフォーレで学生アルバイトとしてお手伝いさせていただいたことが、大変貴重な経験となりました。あれから30年以上経過しましたが、そろそろ、国際菌学会あるいはアジア国際菌学会を再び日本に誘致しても良いのではという声を伺っております。とは言っても、このような国際会議はすぐに誘致できるわけではありませんので、そろそろ準備を始める必要があると思います。

### 3. 次世代を育てる

#### (1) 菌学分野へのお誘い

高校までの生物の教科書の中では、菌類についての記述はごく僅かです。生物学を学ぶ上で、確かに、まず高等植物、動物、特に人間の生物学に関する知識を勉強することは重要です。しかし、教科書に書いてあることは生物学のごく一部の情報で、もっともっとおもしろい世界がある、未解明の世界があることを若い方達にも知っていただき、菌類の世界に興味を持っていただきたいと思います。そのような機会、企画を提供し、菌学の発展と普及を推進していきたいと思えます。

また、普段生徒さん達を指導されている先生方に、菌類に関する基礎情報を提供することも重要と考えています。教科書には載っていない、身の回りにたくさんの菌類が存在し、我々の生活に深く関わっていることを知っていただき、教材として利用していただくことで、生徒さん達に菌類の世界を知っていただくことができると思えます。また、菌類に興味を持った生徒さん達に適切なアドバイスをしていただき、より専門的な知識を得るためのチャンスへとつなげていただけると有り難いです。

#### (2) 学生、ポスドク、若い研究者の育成

また、次世代を育成するためには、菌学研究の世界に飛び込んで下さった学生、ポスドク、若い研究者の方々の支援も、重要な課題と考えています。近年、国際社会でリーダーシップを発揮して活躍できるグローバル人材の育成が求められています。大学の中にも、それを最重要な課題として掲げている大学も多くあります。研究発表の場として、国内の学会はもちろんですが、海外で実施される国際学会やシンポジウムで発表することが求められるようになってきました。そのために、当然経済的負担がかかるわけですが、その支援をし、海外での活動を奨励することも重要なことと思えます。そのようなことは大学で対応すれば良いだろうというご意見もあるかと思いますが、昨今、大学だけでは十分な支援ができない状況となり、学会の協力が必要になっております。ま

た、このような学会での発表が評価され、口頭発表賞やポスター発表賞を取る、論文賞、学会奨励賞を受賞するなど、その業績が権威ある学会より評価され受賞するということは、若い方々の将来にとって極めて大きな意味を持っています。あまり賞を作りすぎて、価値が下がってはいけません、若い方々が受賞する機会を確保していきたいと思えます。

#### 4. 研究者間の交流ネットワークの構築

日本菌学会は、菌学の発展と普及を推進することを目的としており、菌類に関する基礎研究から応用まで、様々な分野に関わる会員が参加し、活発に活動されています。対象となる菌類も研究分野によって様々で、キノコ、カビ、酵母、さらには変形菌や卵菌類などの偽菌類など多様です。それぞれの専門分野で、より専門的に深く掘り下げた研究とその成果が求められるようになり、それぞれの研究者がカバーできる研究分野は狭くなってきたと思えます。最近、その成果がすぐに役立つ研究が脚光を浴び、注目される傾向がありますが、やってもすぐに役に立つ成果が出そうもない基礎研究が敬遠されがちです。すぐに役立たなくても、未知なものを解明していくこと、何者かを知るために様々な基礎情報を集め、その本質を理解することも、大変重要な研究になります。このような基礎研究なしに応用研究は成り立ちません。一方、基礎研究を行いながらもそれが将来どのように使われるかを考えたり、あるいは応用分野の研究者とのネットワークを利用して情報を共有し、共同研究に発展させたりすることも必要だと思えます。この学会には、“菌類”をキーワードとして、様々な専門分野の研究者が集まっています。菌学会が、それぞれの専門知識を交換する場を提供し、他ではできない新しいネットワークを構築する機会となり、これまでに無い科学技術のイノベーションにつながればと期待しております。

この学会の特徴の一つは、アマチュアの会員が多いことだと思えます。ここでいうアマチュアとは、菌類に関する研究を仕事としては行っていない方という意味であり、それぞれ専門とされている菌類に関する知識や情報、研究に対する熱意や真剣さは、専門家の方々に負けていません。仕事として扱っていると、時には好きでなくてもやらなければならないことも有り、また自分の純粋な好奇心をあえて殺して、成果を求めなければならないこともあります。それに対し、アマチュアの方は、本当にそれが好きで情熱を持って取り組んでおられ、それがこの学会の重要なパワーの一つになっていると思えます。アマチュアの方々にも、是非このネットワークの一員として加わって頂き、菌学研究の発展に寄与して頂きたいと願います。

私自身、日本菌学会が益々発展しますように、努力していきつくりしておりますが、会員の皆様のご協力なしには目標を達成することはできません。皆さまには、今後益々活発にご活躍いただくとともに、学会に対する変わらぬご支援、ご協力をお願いいたします。

# 日本菌学会創立 60 周年を迎えて

山岡 裕一（日本菌学会会長）

日本菌学会は、今年で創立 60 周年を迎えます。戦後発足した菌類談話会を前身とし、昭和 31 年 2 月 20 日草野俊助先生を初代会長として上野の国立博物館で発足いたしました。菌類談話会のこと、日本菌学会誕生の経緯や創立初期の活動の様子については、印東弘玄先生（1991）が日本菌学会ニュース 1990-2 に創立 35 周年を記念して特別寄稿された記事の中で詳しく述べられています。また、そのニュースレターの中で、宇田川俊一先生、鈴木彰先生により、日本菌学会 35 周年の歩みとして、運営の歴史に関する資料がとりまとめられています。これらの資料を基礎とし、2006 年には日本菌学会会報 47 巻の創立 50 周年記念号と日本菌学史を発行し、その中で、菌学会の活動の歴史、菌学の発展に貢献された先生方の紹介、先生方やこれまでの活動にまつわる思い出など、日本の菌学の歴史を知るために重要な資料や記事がたくさん掲載されています。是非一度ご覧下さい。

昭和 31 年（1956 年）に発行された日本菌学会会報第 1 号の冒頭には、日本菌学会設立の趣意書が掲載されています。その趣意書では、「この学会の目指す理想は高い。しかし、狭く不安定な基礎の上には高い理想の塔は建設されない。日本の菌学は多くの人の理解と協力とを基盤としてうち建てられなければならない。とくに長い間下積にされた日本の菌学の飛躍的な進歩は、専門家とアマチュアとを問わず、同好同学の士相互の緊密な提携、連絡とを欠くべからざる条件とするからである。明治初年、近代菌学が日本に始まってすでに 70 年余、今日ようやく日本菌学会が創設されるに当たり、全国の同好同学諸賢の力強い協力を心から期待する所以である。」と結ばれております。日本の菌学の発展のためには、専門家、アマチュアを問わず、菌類に関心を持ち、菌学を学ぶ者相互の緊密な提携、連絡が重要であるという基本的な精神は今も受け継がれております。この 60 年の間、諸先輩方の活発な継続的活動より、日本菌学会は高い水準の研究成果を提供し続け、菌学の発展、普及に大きく貢献してきたと思います。

日本菌学会の活動は当初から国際的に高く評価されてきましたが、この 60 年の間にいくつもの国際学会、シンポジウム、ワークショップの開催や協賛を行うなど、国際的な交流を促進してきました。また、日本菌学会会報から英文誌の Mycoscience を独立させ、さらには Impact factor を取得して国際誌として高い評価を得

るまでに発展し、現在は、特にアジアから世界に向けての重要な情報発信源となっています。

60 周年を迎えるに当たり、その記念事業については、前期から 60 周年特別委員会で検討を重ねてきました。その検討結果を受けて、次のような企画をすすめております。

## 1. 創立 60 周年記念大会（近畿大会）の開催：

2016 年 9 月 16 日（金）～18 日（日）、京都大学農学部本館・理学部セミナーハウスにおいて、田中千尋大会会長のもと、日本菌学会創立 60 周年記念大会として開催予定です。その中で、特別企画として、海外からの講演者を中心とした菌類の生態と多様性に関する国際シンポジウムと、国内からの招待講演者による記念学術シンポジウム「菌学 60 年の進歩」を開催する予定です。

## 2. 創立 60 周年記念出版物「菌類の知られざる世界(仮)」の発行：

菌類は“汚いバイキン”と誤解されがちですが、「美しい」「たくましい」「多様・多才」「意外性・驚き」といった菌類の魅力を一般の方々に伝えることを目的として、菌類の姿を様々な切り口から写真中心で紹介する出版物（本）を企画しています。すでに、会員の皆様から写真・原稿のご提供をいただき、細矢企画・普及担当理事が中心になり、着々と準備を進めております。60 周年を記念して、多くの学会員の協力により、多様な菌類のありさまを紹介できるように考えています。引き続き、学会員の皆様のご協力をお願いします。

また、すでにお知らせしておりますように、現在学会の法人化に向けて準備を進めております。先に述べましたように、本年度の総会は 9 月の記念大会の時になりますが、その総会で「一般社団法人 日本菌学会」を設立することが承認されますと、来年度末で現在の日本菌学会は解散になり、61 周年に当たる平成 29 年度からは、法人として正に生まれ変わることにあります。法人化に伴って活動内容を大きく変更する必要はなく、本学会がこれまで目指してきた目的に沿って活動を続けていけば良いと考えておりますが、同様の活動をしていても、学会自体の社会的信用性が高まり、社会への影響力も高まると期待しています。